

## 安野発電所フィールドワーク報告

創価大学文学部教員 倉橋耕平

2月26日(月)、安野発電所中国人強制連行のフィールドワークに参加させていただき、「継承する会」事務局長の川原洋子さんにご案内いただきました。安野発電所、坪野収容所跡、安野中国人受難之碑を皮切りに、津浪収容所跡と西谷立杭、香草収容所跡、香草工事現場跡、土居取水口を周り、詳細な説明をしていただきました。

普段、日本の右派の歴史修正主義の動向や韓国と日本の間の戦後補償問題を中心に研究を行っている身としては、(恥ずかしながら)これまでに中国人強制連行と強制労働に目を向けたことがあまりなく、その歴史のもつ凄惨さを痛感させられる経験となりました。広島に行く前に現在手に入るすべての資料をお送りいただき、事前知識を叩き込んで参加しましたが、やはり現場から感じるものと、説明をいただいてようやくわかることがたくさんありました。長々と書く紙幅はないので、2つに絞って感想を記したいと思います。

まず、「受難(者)」という言葉についてです。川原さんの解説によれば、「安野中国人受難之碑」という名称は中国の当事者・遺族の方が決めた言葉だと聞きました。戦後補償問題では、主に「被害(者)」「サバイバー」「遺族」などの言葉を使います。あるいは、「殉難」「殉死」のような言葉が使われてきました。そうした観点からは、「受難(者)」という言葉は聞きなれない言葉でした。その意味では、「被害」よりも当事者の心情を表すとともに、射程・認識枠組みを拡大しうる言葉です。その一方で、この言葉が西松建設側には受け入れやすかったとも聞き、責任を曖昧化する両義性も感じるものでした。

もう1つは、受難者の中国人271名が認定された反面、800名近くいたとされる朝鮮人の行方はわかっていないことも、戦争時の状況を映し出していると感じざるを得ませんでした。さらには、中国人の強制労働には「隊長」という軍隊式の統治が用いられ、中国人に中国人を管理させたことも印象的です。さらにその上に朝鮮人がいて、その上に支配層としての日本企業・日本人・帝国日本という存在があります。この「民族」を用いた階層秩序は、植民地主義・帝国主義を貫いたレイシズムが末端まで行き届いていたことを痛感させられます。すなわち、上から、宗主国－植民地－侵略国、日本人－朝鮮人（植民地の日本人）－中国人、資本家－搾取される人－収奪される人、という階層秩序を民族の違いや文化的な優劣を用いて支配する近代国民国家と資本主義の暴力が最も剥き出しの現場が「安野」なのだと思います。

フィールドワークに出かけた日は、前日に少し雪が降っており、当日は時折雨に降られる空模様で、非常に冷え込んでいました。この中を履くものや着るものもなく、「受難者」のみなさんが水に打たれながら1年間強制労働をさせられていたと思うと、身の毛もよだつ思いがします。

このような非常に大切な機会であるにもかかわらず、これまでに安野を訪れる研究者も少なく、本件の補償運動のことを記した学術的な書きものが（管見の限り）少ないことに研究者の一人として反省も感じます。戦争責任を追及する市民社会の運動はまだ続いているので、今後繰り返し参照される和解事例になると感じました。

川原さん、ありがとうございました。